

# 米欧回覧

第21号  
編集・発行  
米欧回覧の会  
事務局

## 第十九回例会

### 「日本をどうする？」 四人の弁士が熱弁

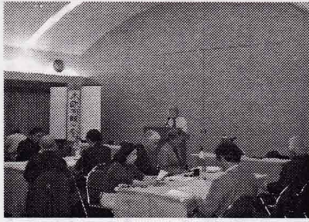
第十九回例会は、現未来部会の担当で、十月二十一日、国際文化会館ホールで四十三名が集まって開催された。同部会は多士済々で論客が多く、四人の弁士がたつて「日本をどうする」の課題に取り組んだ。テーマの大きさに比べ少ない持ち時間に、各弁士とも苦勞していたが、それだけに中身の濃い、迫力のある発表となった。(詳細四、五面)

#### 平成の使節団？

#### 「新・独逸回覧」

新しい試みであり、今後の展開の方向を示すものとして高い評価を受けたが、三時間で四つのテーマでは、充分な論議をつくせないことが問題点とし

第19回例会



国際文化会館ホール

本年は「ドイツにおける日本年」ということである。その行事がドイツで行われた。その一環としてベルリンで八月二十八日から「岩倉使節団展」とシンポジウムが行われ、シンポジウムには岩倉具忠京都大学名誉教授らがパネラーとして参加された。会場はケネディが演説した由緒ある旧ベルリン市庁舎で、当会からも有志十名が参加し、翌日は同じ会場で当会主催の「ドイツにおける岩倉使節団」のスライド上映とディス



ベルリン旧市庁舎におけるシンポジウム

カッションを行った。そのあとドイツ大使館を訪ね、特命全權大使 久米邦貞氏と四十分間歓談することができた。翌日はボン大学にベーター・パンツァー教授を訪ね、日本文化研究所でボン大学の概要やドイツにおける岩倉使節団についてレクチャーを受けた。

更に使節団の足跡を訪ねてフランクフルトなど各地を回覧、短い期間だったが大変充実した旅となった。それには駐在経験もあり、ドイツ語の堪能な山田哲司氏が名コンダクターを務めてくれたことが大きかった。(詳細二、三面)

来年は「英国における日本年」ということであり、平成使節団の「英国回覧」を待望する声があがっている。



ボン大学キャンパス

岩倉使節団が訪れたときのドイツと日本にはいくつもの類似点がありました。大久保利通が「英米仏などは開化登ること万層にして及ばざること万層なり」といい、久米邦武が「ドイツに学ぶこと英仏よりかえって益多かるべし」と書いた背景にはそれがあつたのです。ドイツが、近代化の先頭を走る英仏国に遅れた中進国であつたこと、

## ドイツと日本

泉 三郎

いきました。そして共に最後は大敗北を喫し、戦後は廃墟の中から同じように経済の復興を成し遂げ、経済大国として見事にのしあがったのです。そこには勤勉、有能、努力、几帳面、まじめ等の国民性の共通点もあつたといえるでしょう。

憲法政治とはいへ皇帝の権力が絶大だつたこと、長く領邦国家が続き最近になつて統一されたこと、農業を基盤に工業化に注力していたこと、人口・面積も比較的似ていたこと等によるものです。

そのことは、その後の百三十年の歴史に於いて、両国がかなり似たような道を歩む原因にもなりました。日本も国家主導で開化を進める必要があり、国権重視のドイツ憲法を手本にすることに、英米仏露などの列強に対抗するために富国強兵策を採りました。そして列強の帝国主義と衝突して再三戦争を起こし、とくに第二次大戦では両国は同盟を結んで戦

しかし、この十数年で両国はすっかり差異ができてしまつたようです。ドイツは東西分裂の後遺症がありネオナチの問題はあるものの、憲法というべき基本法を改正して独立国家として歩みアメリカ軍隊を撤退させました。そしてその間、住空間の充実、農業や自然の保護、長い余暇時間、堅実でゆとりある生活を確保してきました。さらには環境問題への取り組みも厳しく、欧州連合のリーダーとなつて世界の先端を歩いています。翻つて日本はどうか、いい加減にアメリカ一辺倒から脱すべきではないか。そして、欧州各国とりわけドイツからも学び直す必要があるのではないか、それを痛切に感じるのです。



# 当会初の海外ツアー／独逸回覧実記

国際交流部会  
山田 哲司

国際交流部会主催による第一回の海外旅行の計画が提案されたのは今年の新年会で。今年がドイツにおける日本国大使が久米邦武の曾孫にあたること、八月末よりベルリンにおいて岩倉使節団展(毎日新聞社主催)が開催されることなど、諸般の情勢から、八月にドイツ旅行を実施することで準備に入りました。我々の目的は



ラートハウス (会場)

上記岩倉展関連行事の一つとして当会主催の映像の会及び討論会を開催すること、使節団の足跡を訪ね出来る限りの事実検証をすること、その今日的意義を明らかにすること、実記に関心を持つ人々との交流を計ることなどでありました。三月より参加者を募り、多くの方々の参加を期待いたしました。結局十名の参加にとどまり旅行社に依頼するには至りませんでした。参加メンバーは泉、合田、石川、岩崎、川井

ご夫妻、小山、藤原、正木、の各氏に山田を加え十名、手作りの旅となったため最終的な計画が細部まで煮詰まったのは出発の数日前という慌ただしさでした。

つぎに日程を追いながらツアーの概要をご紹介します。

八月二十六日夜 岩崎、山田の先発隊がベルリン着、翌朝直ちにラートハウス シェーンブルグにて会場ならびに機材の確認。泊ウエステイングホテルベルリン。

二十七日 泉代表以下の本隊が到着、深夜迄打ち合わせ。



スライド上映を終えて



久米大使を表敬訪問

二十八日 午前は毎日書道会展(岩倉展と同時開催)の記者会見に出席、午後からは岩倉展を記念して行なわれたシンポジウムに参加し、終了後同展覧会を見学、見るのが貴重な興味深い資料を見ることができました。夜は書道会主催のパーティーに出席。

二十九日 十時半より当会主催による岩倉使節団のドイツを中心としたスライド映写会および討論会。まず山田から歓迎の挨拶(ドイツ語、およびスライドと説明(英語、第一部二十分 第二部二十分)があり、ついで討論に移りました。出席者は約二十名とやや少数でしたが、討論に先立ち泉氏より使節団の今日的意義についてコメントされたこと、昨日のシンポジウムの出席者からも数名の方の参加があったことなどあって、論議は実のあるものとなりました(通訳及びコーディネート 藤原氏、ほか音声、照明、

映写、写真、受付など全メンバーが役割分担)。十二時過ぎ終了、十四時日本大使館に久米邦貞大使を表敬訪問、統一後のドイツの状況やグローバリゼーションなどについて貴重な意見を伺う事ができました。夕方のフライトでボンに飛びブリュッセルホテルに投宿、夕食に出かけようとしていたところホテル前でパンツァー教授と出会う。教授が翌日の確認のためホテルへ来られたところ、一同で中華レストランへ出かけおおいに盛り上がりました。

三十日 八時半、ボン大学日本文化研究所にパンツァー教授を訪ね日本研究の現状や岩倉研究についてうかがいました。使節団の概要を紹介する立派なパネルも作られており大変参考になりました。十時ボン発大型バスでライン河沿いにリュードスハイムに向かいました。

途中ゴブレレンツを過ぎるあたりでシュトルツエンフェルス城を遥かライン河対岸に確認、黄色の優雅な姿をみせるこの城は、使節団が訪れたに違いないがまだ研究中と今朝ほどパンツァー教授に教えられたばかり。やがてリュードスハイムに到着、二人乗りのロープウェイでライン河を眼下にゆるやかな斜面にブドウ畑が広がる絶景の中を空中散歩十分、高台

に至る。ここは使節団訪独のわずか二年前に終わった普仏戦争の戦勝記念女神像建立の地、しばし往時を偲び、再び村に帰りドロウセルガッセでワインとソーセイジの昼食、十四時の遊覧船でライン河下り、兩岸に現れるは消える古城やローレライの眺め、燦々と降りそそぐ陽光をあびて飲むビールは最高でした。ザンクトゴアールハウゼンでバスに乗り換えケルンへ、ドームなどを見学して夕食後列車でボンに帰着。

九月一日 ボン駅発の特急ハイドン号にて昨日の船旅の逆コースを、車窓よりの眺めを楽しみつつフランクフルトへ、十二時到着。インタンクコンチネンタルホテルにチェックイン後直ちに市内見学へ、使節団も訪れた旧市庁舎であるレーマー見学中に在独日本人の城小百合さんと知り合い、同夫人の解説でドーム、歴史博物館などを



ボン大学パンツァー教授を訪ねる

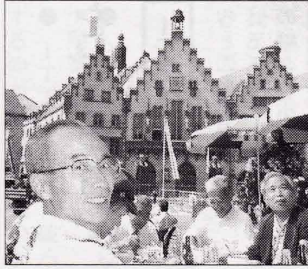


二日 藤原、石川、小山の各氏はそれぞれの所用にて早朝に出発し残り七名にて市内見学、先ずパルメンガルテン(実記ではハリマガーデン)を訪ねる。鉄とガラスの熱帯植物用温室を見て園内散策、ほぼ当時のままのたたずまい。ついでブendesバンクの隣にある貨幣博物館において、実記にあるノーマン社について調べる。当時フランクフルトにあった印刷会社はノイマン社といひ現存していないが、確かに日本政府のため紙幣を印刷していることを確認。午後はハイデルベルグを見学し空港へ、ここで泉、正木の両氏と別れ、残る五

見学し後は二手に分かれて、一班はユダヤ人墓地へ、一班はゲーテ博物館へ。夕方からは買い物、夕食は解散式をかねてザクセンハウゼンのレストランでドイツの料理と歌、フランクアンワインなど地元の酒でツアーを締めくくりました。



ライン河の船旅



レーマーハウスの前で  
(フランクフルト)

名で成田へ。  
終わりに一言、先ずは当会第一回の海外旅行が事故なく無事に終了できたことを、メンバー各位とともに喜びたいと思います。これはメンバー一人一人が単独行も可能でありながら、ツアーの成功のため一致協力、それぞれの役割をきちんとこなされたことによるものです。今回は日時、会場、設営、広報、など毎日新聞側にお任せしていたためある程度の制約が予想されていましたが、結果としては自分達の手作りによる方がよかったとの反省もありました。特に人集めはその結果が討議の内容に直接影響するだけに、もう一つ工夫があってもよかったですと考えています。  
なお、ドイツ旅行の詳細は国際交流部会のホームページに追って掲載の予定です。  
(掲載写真は岩崎氏の撮影です)

分科会だより



実記を読む会

Tel:03-5469-2090  
Fax:03-5469-2093

クラウンインターチェンジ

◆米欧回覧文庫  
オープン  
毎回の発表者の資料と関連図書を集めた小さな文庫が作られました。内容は、内容が下記の通り。毎月読む会開催日に十八時より開きます。貸し出しはノートに記入の上お借り下さい。  
(電話・FAX等による送付サービスは致しておりません)

歴史部会  
連絡 半澤健市

Tel/Fax:03-3717-5576  
khanzawa@dh.catv.ne.jp



◆哀悼  
十一月三十日  
私、幹事の小田八郎さんが急逝されました。故小田さんとはずっと一緒に部会の幹事をつとめて参りましたので残念の気持ちで一杯です。  
慎んでご冥福をお祈り申し上げます。(幹事 半澤健市)

◆第十四回部会報告  
福澤諭吉を三回連続でとりあげた部会の、福澤最終回は、西部邁氏を講師に迎え、九月二十日に開催されました。

★米欧回覧文庫★

<資料の部>

各発表資料7回分

<蔵書の部>

1. 米欧回覧実記を読む 西川長夫、松宮秀治編 (1870年代の世界と日本)
2. アメリカの岩倉使節団 宮永孝
3. 米欧回覧実記の学際的研究 田中彰、高田誠二編著
4. 青木周蔵 上・中・下 水沢周 (日本をプロシヤにしたかった男)
5. 岩倉使節団 田中彰 (明治維新の中の米欧)
6. 四日市「米欧回覧実記の会」会誌創刊号
7. 堂々たる日本人 泉三郎
8. 米欧回覧120年の旅 米英編 泉三郎
9. 同 欧亜編 泉三郎
10. 異文化遊歩 泉三郎
11. 新・米欧回覧の記 泉三郎
12. 岩倉使節団の見た世界：「米欧回覧実記」の風景



歴史部会での西部邁氏

氏は著書「福沢諭吉」(文芸春秋・一九九九)をテキストにして従来の近代主義者としての福沢解釈の一面性を批判し独自の福沢論を展開しました。  
またこの著書の編集担当者である文春の浅見雅男氏からも企画の背景や論壇における西部氏の位置など興味あるコメントがありました。そのあと熱のこもった質疑応答があり盛り上がりました。



関西支部

連絡 山崎岳麿

TEL/FAX 06-6853-3137

十一月九日、八名が参加して例会が開催されました。先ず、京都の霊山歴史館の「維新そして国際舞台」岩倉使節団「日独交流史展」の報告がありました。中村さんがインターネットで探したアメリカのプリンストン大学月報の岩倉使節団に関する記事の話題の後、「米欧回覧実記」英国編をもとに多様な領域に渡る討論がありました。(詳しくはホームページに掲載されています)



第19回例会

これからの日本をどうするか

提言要旨

二十一世紀に向けての教育



協山真木氏

今日の学校の荒廃の要因は色々あるが、制度面で改善すべき点が相当ある。日本には若田さんのように宇宙船の中で俳句を詠むような科学者もあり、すばらしい伝統がある。悪いのは国民でなく制度ではないか。最近、朝の十分間学校で「読書」する運動がはやっており、学校中が水を打ったように静かになっている。やり方の工夫をすれば教育は相当よくなる。四つの提案をしたい。

(一) 師範学校制度の復活。教師の社会的地位の向上により、「でも、しか」先生ではなくもつと使命感を持ったプロフェッショナルな教師を期待したい。  
(二) 相続財産への税制優遇措置(非課税)による教育基金の確保。政府から市民に教育を取り戻したい。昔の寺小屋や小学校は地元の浄財によ

るところが大きい。  
(三) 産学協同(企業と学校の融合) 小中学校の頃から貴重な社会人の経験を聞くと学ぶ意欲が生まれる。  
(四) 社会学協同(地域社会と学校の融合) 習志野市の「秋津コミュニティ」は学校の教室を休日などに開放し、「大正琴」、「囲碁」等への四十一ものサークル活動。親と子の関係もよくなり、不登校生ゼロ。論じるだけではダメで行動することが大事。

日本経済の当面する諸問題



野口宣也氏

日本経済の近年の低迷は失われた十年と呼ばれる。先日も政府の規制改革委員会の医療問題に関する公開討論会を聞いて議論の知的誠実さの欠如に落胆した。九十年代の低迷の背景は  
(一) 不良資産問題の重圧  
(二) 人口構成の変化に伴う将来不安

(三) 柔軟性に欠けた経済構造が重なってもたらされた。高度成長期にプラスの役割を果たした終身雇用制、株式の持ち合い、業界保護的な規制、メインバンク中心の産業資金供給などが制約要因に転じた。今後の日本経済を良くしていくためには、「市場の信認」を得られる経済政策運営が何よりも重要。「小さい政府」を目指し、より生産的な部門への資源配分のシフトを行い、イノベーションを引き出す障害となる各種制度(法律、税制、会計)の見直しが必要。企業や個人の自由な選択を日本経済の効率的な成長へのドライバーング・フオースとして活用すべき。他方、安定的で効率的な社会保障制度を構築し、将来不安の軽減、チャレンジ支援姿勢を明確にすることも重要。

IT革命



柳沢賢一郎氏

IT革命ともてはやされているが、本当に革命といえるのかが、革命と呼べる程の変革をもたらすものではない。ま

ず、ITは知識は扱えるが、知恵は扱えない。人間社会を支配しているのは知識ではなく、知恵であり、例えば、ITによって、企業間の取引が効率的になっても、「信用」はITでは担保しえない。ITの生産性向上効果に関して、アメリカではこれを疑わしいとする説も唱えられており、アメリカの「Comcast」も今年の春頃がピークだったのではないかと。電話やFAXと同じ程度の社会インパクトはあるが、それ以上に革命などと騒ぐのは二十年前のニューメディアブームの際の教訓から全然学んでいないのではないかと。

「中山間地」をめぐる諸問題



長縄源太郎氏

秩父の山小舎に行き来して十年になり、その経験から日本各地にみられる平野部から山に向かう傾斜地(中山間地)の問題点を話したい。この地域では、人口高齢化、耕作放棄、林野の荒廃、環境悪化等の様々の問題に直面している。しかも、日本の農業の大体四割ぐらいのウェイトを有する。この地域の公益的機能(洪水防止、水資



司会の塚本氏

源涵養、気候緩和、大気浄化などを金額評価すると年間四兆円に達する。しかし年々劣化しつつある。  
道路整備が進み、ストローが水を吸うように人口流出が生じ、東南アジア、中国からの嫁も増加。将来的な食料難、地球温暖化の観点からも田畑、森林の荒廃は放置できない。対策として、(一) 中山間地域等直接支払制度(デカップリング)。今年度からウルグアイラウンド対策の一環としてスタートし、現在は田畑に補助することになったが、ただ、十アール(三百坪)当たり、急傾斜地で二万五千円、一戸平均八万六千円/年では、あまりインセンティブにならないかもしれない。(二) 青少年の「奉仕活動」。例えば、森林の間伐、田畑での農作業などを行ってはどうか。(三) 帰農、入農。年金生活者などで農業をやりたい人は多いが、地元自治体は社会保障負担が増えるため、必ずしも歓迎しないので、国からの補填によりこれをやりやすくしてはどうか。(四) グリーンツーリズム。欧州のように農家、牧場で体験宿泊を受け入れる案。



### 質疑応答

それぞれのテーマに分かれて会員が討議を行った後、テーブル代表が意見と感想を発表し、脇山、野口、柳沢、長縄各氏からそれに対するコメントがあった。

### 教育

- 日本の伝統・誇りを失った形の教育はよくない。和魂洋才を再確認すべき。
- 知識ではなく、知恵を育てる教育が大事。アメリカでは子供の能力を伸ばすことに熱心。
- 子供の教育は親の問題でもある。秋津コミュニティを全国に展開すべき。
- (脇山氏のコメント)
- ◆ 国が教育についての基本的方針を確立することが望ましい。



報告者との討議

### 経済

- ◆ 日本でもデイベート、ディスカッションすることがまず重要。
- 今後の経済運営に関し、マクロ的な成長率を何%と期待するか、ミクロ的な雇用のミスマッチなどをどう考えるかなど分析の視点を明確にする必要がある。
- 「失われた十年」の要因として、国民にきちんと説明して厳しい負担を受け入れさせる努力が政治に足りなかった。
- 今後の見通しに関し、ここ数年は悲観的という意見が強かった。
- (野口氏のコメント)
- ◆ 「ここ数年は厳しいが、いずれはよくなるとするのが楽観論で、ずっと厳しい時が続くというのが悲観論だろう。」
- ◆ 「一〇〇ぐらいの経済成長の軌道に乗れば良いと考えている。」
- ◆ 八十年代の評価に関しては、戦後目指してきたものが達成された(国際収支の天井の克服、経済の二重構造の解消)と同時に、巨額の黒字による低金利がバブルの要因となったという因果関係にある。
- 日本の社会は今あらゆる面で閉塞感あり。
- ITでこれを打ち破ろうとするのが森内閣の狙いかも。

### IT革命

れないが、それは難しいだろう。

- ITの限界を知ることは大事。信用をカバールせないし、緊密な人間関係もITだけでは無理。限界を知りつつ、ITをうまく使うことが大事。
- (柳沢氏のコメント)
- ◆ 情報技術としてのITは認めるが、革命と呼ぶことはふさわしくないとの自分の意見に同調する意見が多かったことに心強い思いがした。
- ◆ 「希望の国のエクソダス」(村上龍)を読んだが、どうしてこうもネクラに社会をとらえるか不満。インターネットがネクラなコミュニケーションの道具となることを懸念。特に子供が危ない。
- 中山間地
- 深刻な状況は十分理解できたが、タテ割り行政でこれを解決することは無理。人口減少が最大の問題。
- 解決に関しては悲観的にならざるをえない面があるが、地元の人々の努力で改善していくしかない。
- 富山県などでボランティアの人々が協力したり、長野県の安曇野では農作業の外注化が進んだりしているケースも一つの解決法だ。
- 日本の原風景が失われることに都市の人々ももっと認識を深めるべき。学校教育でも教

えていない。

- (長縄氏のコメント)
- ◆ 緊急かつ重要な問題と思う。四つのアイデアを示したが、やり方の工夫次第で色々な解決は可能。
- ◆ たて割り行政を打破して、「政策構想力」を高めることが大事。
- ◆ イギリスでは食糧自給率を五十三%から百%に上げた。荒れ果てた田畑は全く見られない。日本で同じことができないはずがない。



グループに分かれて討議

その後、全体的な議論を行ったところ、主な意見は次のとおり。

- ドイツなども農地の保全は見事。日本の里山の保存もこれから重視すべき。
- 学童疎開を経験し、食糧の大事さを痛感。食糧の貴重さを実感するには、月に一回ぐらい学校で給食を抜いたり、国民が
- コメをもっと食べる運動をしてはどうか。
- 英語教育を小学校からというが、日本語がしゃべれないのに外国語をやるのはおかしい。また、小学3年生に舞台という字を書かせて、漢字を書くところまで教えられるという字は書いてはいけない。平等主義の悪い例だ。二けた以上の計算をやらせないため、円周率を三とするのも問題。
- 最後に、泉三郎氏から次のような総括的コメントがあった。
- 三時間半にわたって議論して、我々の認識もだいぶ深まったのではないかと。経済のところまで、日本の成長が行き着くところまで到達したとの議論があった。
- 私は、これからは、非経済的な価値を求めていく時代になるのではないかと考える。心、精神、美、人間関係、モラル、生きがいなどを高めていくことが日本にとって重要と考える。ITの議論もあり、子供や大人のおもちゃとなっているものの意見があったが、ある意味で幻想的なおもちゃであるが故にブームになっている面もある。
- とにかく、それぞれのテーマについて「もっとまじめに考える」ことが大事だと思う。



### 「実記を読む会」のレポート③

## 私は「米欧回覧実記」をこう読んだ

### 使節団が訪れた時代のアメリカ

水沢 周

#### Sアメリカ記述の比重

岩倉使節団がサンフランシスコの地を踏んだのは一八七二年一月、これは下関を英仏蘭米四国連合艦隊が攻撃してから七年半後、そして南北戦争が終わって七年足らず後のことであった。つまり彼らは、人命損失六〇万を数え、分裂の最大の危機を何とか乗り越えた合衆国の再建がようやく軌道に乗ったまさにその時に、この若々しい国を訪れたことにな

る。『米欧回覧実記』は全百巻という構成を持つているが、アメリカについての記述はその五分の一、二十巻を占める。当時の列強といえはまず英仏露として新興のプロシヤとアメリカがそれに続くと思うが、それにして、アメリカの記述がイギリスのそれと並ぶ比重を持つことについての意味を考える必要があるだろう。理由は

ろいろあるが、ほかならぬアメリカが日本開国の最大の推進者だったこと、また最初の視察地としてフレッシュユナ印象を持ったことも大きな理由の一つだが、最大の理由は、アメリカが全くの新進国家で、その成長が僅々数十年の間に行われたにもかかわらず、資本主義社会の発達が著しいことに感銘を受けたということではないか。

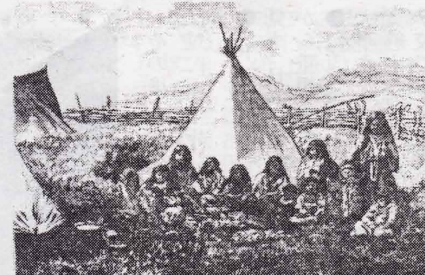
しかも、彼らはサンフランシスコからワシントンに至る長い鉄道の旅によって、その数十年の発達の歴史のパノラマを車窓に見ることが出来た。アメリカ編二十巻のうち、四分の一にあたる五巻がこの大陸横断のパノラミックな旅のレポートに当てられているというところは、その印象の強さを物語っている。彼らは毎日移り変わる車窓の風景を、目を皿のようにして見つめ、見たことを即、熱心に語り合ひ、記録し、分析しつつ移動して行った。

#### S大陸横断鉄道の意義

彼らが移動手段として使った大陸横断鉄道は、わずか一年半前に完成したばかりのもの

月読告レ 皆稿て  
9を報の 人は、記の  
「実」会の人す。では投し  
回「実」会おト部でのち  
のむ者お一集かおす。  
編様をい

である。また彼らが旅を楽しんだ「スリーピングカール(寝台車)」「や」ダイニングカール(食堂車)」、そして列車の急峻な山岳越えを安全に果たすためのエアブレーキも、開発されたばかりの新製品であった。アメリカの鉄道開発は、イギリスと並んできわめて早くから行われたが、はじめ、東部のローカル路線敷設が中心で、太平洋と大西洋を結ぶ国家的戦略路線はなかなか出来なかつた。技術的な問題もあるが、こうした国家的路線が引かれることによって、国権が州権に優越することを嫌う南部諸州の反対が、建設計画の議会通過を阻み続けたのが主たる理由である。南北決裂で逆に連邦議会でのフリーハンドを得た北部側は、戦争中に計画を確立、戦後まもなく国家再統一のシンボリック行動として、急速な鉄道建設に邁進した。使節団が通ったのはそういう意味で、アメリカが統一国家からやがて世界国家へと移行して行く道そのものであったと言えよう。彼らは車窓から穴居原住民の姿を認め、また、原住民たちが鉄道建設工事を襲ったりしたことがあるというエピソードを語っている。合衆国の原住民に対する政策はこのころ強硬な排除策を



インディアンに住居 (銅版画集NO.5)

取っていたが、横断鉄道建設に際しても原住民からの土地収奪や、その重要な資源であるパイソンの絶滅などを看過し、建設終了後、合衆国政府と原住民の間の緊張は決定的な段階に達していた。使節団はその緊張のただ中を、あまり意識することなく通過して行ったわけである。

#### S再建時代とは

南北戦争の遠因・近因については、政治・経済・社会的な興味深い問題が多々あるが、紙数の関係で省略せざるを得ない。しかし、四年にも及ぶ血みどろな戦い(人員損失六十万という数字は、第二次世界大戦におけるアメリカの人員損失のほぼ倍である)の結果、合衆国政府は国権の優越をほぼ確立し、敗北者南部諸州を経済的・政治的に抑制しつつ、西部フロンティアに政府主導的な自作農の創

設など、積極的な政策を進めた。また、この時期、石油、鉄鋼、鉄道、食品工業などの産業が独占形態を強化しながら急速に発展し、アメリカ資本主義の基礎を強めた。さらに戦後復興の経済再建機運も強く、土地投機なども盛んであった。さらに、そうした機運を背景に、政治的腐敗も顕著となり、このため再建時代は一名「金ピカ時代」とも呼ばれた。一種の「パブル経済」の時代である。

岩倉使節団はアメリカ各地で「熱烈歓迎」を受け、新興産業の活況を見せつけられて、若きアメリカの活性に対する深い感銘を心に刻み付ける。そして、資本主義の要諦は物を運び、加工し、付加価値を求めることだと感得する。さらにまた、国権の有効な行使と民力の効果的な育成ということが持つ有利性にも強い印象を持った。この認識は、これ以降のヨーロッパやアジアの旅でも大きく変わることはない。その意味で、使節団が一種の「高度成長期」にあったアメリカを肉眼で見、皮膚で感じたことが持つ意義は大きい。しかし、彼らはもちろんそれが「パブル経済」であることは知らなかつた。彼らが離米してまもなく、「パブル」がはじけ、アメリカは当分デプレッションの時代になるのだが、もし、そのデプレッションの時代に使節団がアメリカを訪れたと仮定すると、この旅の印象はかなり変



わっていたであろう。  
 また、これはないものねだりではあるけれども、もし彼らが戦い敗れた南部に一步でも足を踏み入れたらば、また大きく異なるアメリカ観が生まれただろうと思われる。南部同盟の首都であったリッチモンドは、合衆国首都ワシントンからほんの百キロほどの距離にあるのである。

**この時代を描いた文学について**

「金ピカ時代」とこの時代を名付けたのは、時代を背景にドキュメンタルな小説を書いたマーク・トウエンであった。そのマーク・トウエンは、やや時代を遡るが、奴隷の問題に揺れる南部を舞台に、アメリカそのものを生き生きと描く傑作『ハックルベリー・フィンの冒険』を残した。ストウ夫人の『アンクルトムス・ケビン』はやや感情的にはあるが奴隷問題を雄弁に批判している。後世に書かれたものだが、マーガレット・ミッチェルの『風と土にも去りぬ』、マージョリー・ローリングスの『子鹿物語』、ローラ・インガルス『大草原の小さな家』なども、その時代の南部や西部の地域性を見事に描いた作品である。これら作品の多くの作者が女性であることも興味深い。南北戦争と戦後の時代は、アメリカ女性にとり大変革の時代だった。

**フィラデルフィアにおける岩倉使節団別働隊の記録**

合田 一夫

この記録の原本となる「Diary of Japanese Visit to Philadelphia in 1872」（以下フィラ日記と呼ぶ）は泉三郎氏により、ワシントンDCの図書館で発掘された貴重な資料である。因みにこの文献の所在を知り、研究の一助にした研究者、学者は私の知り泉氏以外になく、その発見の意味は大きい。

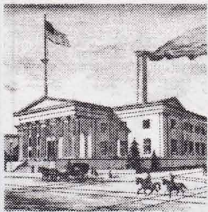
久米邦武の「米欧回覧実記」の中ではわずかに一行余りの記述があり、次のように記されている。旧暦二月七日（陽暦三月十五日）「費拉特費府ヨリ、招状至ル、理事官肥田以下数名ヲシテ、其ノ招キニ赴カシメ、兼テ器械諸製場ヲ巡覽セシム」。この肥田以下の巡覧を詳述したのがフィラ日記で、地元印刷業者のHenry Ashmead氏の同行記事である。

一行のメンバーの構成は理事官肥田為良を長として長野桂次郎（トミー）、阿部潜、沖守固、岩山直樹（敬義）、大島高任、中山信彬、村田経満（新八）、高辻修長の九名である。一方接待側の費拉特費府のメンバーは南北戦争で功績をあげたWilliam Painter 將軍、Fleeder Gerker大佐、地元商

工会の代表J.E. Coldwell氏（日本の御木本宝飾店のような格本のある宝石店の社長）及び当時世界の規模を誇つていたBaldwin 機関車製造会社のBaird氏や商工会議所会頭のBrice氏も含まれて居り、その接待の力の入れようが読み取れる。

一行は市内の一流ホテル、コンチネンタルホテルに宿をとり、陽暦三月十五日より四月六日まで三週間余りを六ヶ所以上にも及ぶ公共施設、出版、学校、教会、製鉄造船工場などを視察している。中には日露戦争に参戦した軍艦「笠置」を建造したCramp造船所も含まれている。「米欧回覧実記」ではこの後、陽暦六月二十二日から二十五日まで、岩倉大使を含む本隊がこの街を訪れ、大金融家であるJay Cooke氏邸に二泊、コンチネンタルホテルに一泊計三泊四日の視察旅行をしている。本隊及びその他の記録については「米欧回覧実記」の（一）の第十八巻三二八頁から三三五頁までに詳しく記されている。

このように、大掛かりな視察旅行であったにも拘わらず日本側の姿勢はあくまでも非



フィラデルフィア合衆国造幣寮（銅版画集NO.21）

公式訪問であったようであり、一行が帰国後大政官に提出した理事功程にはフィラ日記に関する視察旅行には一つも触れていない。一方アメリカ側の姿勢は、外務省、外交資料館にある記録によるとトブリエ・マイエルスという政府高官より日本代理公使、森有礼閣下宛に、米滞在中、費拉特費府では、金銀坐（US. Mint）造幣寮のことと思われる）及び海軍操練所（US. Navy Yard）の視察をすすめており、フィラ日記中では一行をJapanese Embassyと呼び、阿部潜に対してはMinister of Agricultureと位置づけており、公式規模の視察団と受け止めていたようである。特に接待側のメンバーの構成は一日か二日で編成できるような簡単なものではなく、正式に公的視察訪問を予定していたが、はからずも条約改正の本交渉をはじめ、大久保、伊藤副使のトンボ返り旅行の時期と重なり公式訪問ができなくなり、急遽別働隊を派遣したものとと思われる。

このような背景のもと別働隊一行は精力的にフィラデルフィアを中心に視察旅行を続けていたがニューアーク市長のRicard氏からも招待があり、四月七日を含む二泊三日の視察旅行にも出掛けている。ニューアーク公立図書館の副館長C. Cummings氏のご協力で入手した当時の地元紙Newark Daily Advertiserに

よると、Durand Jewelryというティファニー宝石店の前身の工場など十数ヶ所に及ぶ工場、銀行などを視察している。四月七日の視察を最後に、一行はワシントンへ列車で帰着している。

このフィラ日記で特筆すべき事はこの他に手嶋精一、折田彦市、前田献吉、高橋新吉などの公費、私費の留学生の存在で、この日記の随所にその活躍の様子が伺える。中でも手嶋精一は、現在の東京工業大学の前身である日本職工学校の設立に大きく係り、自らも東京工業大学時代を含め二十六年間も学長を勤めたばかりでなく、手嶋精一資金団という育英組織まで設立、運営した人物である。この育英組織は今でも新橋にある蔵前工業会館の中で運営されている。元菊間藩（現在の千葉県市原市）の土族である手嶋は、当時フィラデルフィアの北西百五十軒くらいの所に

あるA College of Lafayetteという大学で建築学の勉強をしていたが、明治四年に廃藩置県のおおりに受け学費が届かなくなり困って居た所に、使節一行が来たという事で通訳役となり四月十一日付で正式に大蔵理事官随行人員という辞命を拝命し、大学を中退し英国まで同行している。

このように使節団一行の役割に大きな影響を与えたとと思われる留学生達の功績も忘れてはならない。



### 「米欧回覧の会」ご案内

**趣 旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。  
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。  
この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。

**会 員** 上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

**例 会** 年に4回くらい全体例会をもちます。

**分科会** テーマ別にグループ活動をします。映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなど。

**機関紙** 年に4回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

**幹 事** 会員の中から、代表1名、幹事十数名を選び、運営を担当します。

**会 費** 年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・分科会・講演会などについては、その都度の会費とします。

**事務局** 当面「イズミ・オフィス」に置きます。  
〒192-0063 八王子市元横山町1-14-16  
E-mail: info@iwakura-mission.gr.jp  
TEL:0426-46-3310  
FAX:0426-45-8700

#### 入会申込

氏名・連絡先(自宅或いは勤務先の住所・TEL・FAX)現職&キャリアを事務局までFAXまたは郵便でお送りください。なお年会費は郵便振込が便利です。  
00180-2-580729 米欧回覧の会

「米欧回覧ニュース」のバックナンバーはホームページに掲載されています。また、インターネットサロン(会議室)への積極的な参加をお待ちしています。

<http://www.iwakura-mission.gr.jp>

### <催し案内>

2000年12月～3月の予定です。

#### ☆マラソン上映会

日 時：12月16日(土) 10:00～17:00  
場 所：日本プレスセンターホール  
会 費：一般 3,500円(弁当・茶代含む)  
学生 1,500円(弁当・茶代含む)  
尚、二次会を17:30～隣接ビルの聘珍樓で行います。  
会費は5,500円です。  
(お申し込みは電話又はFAXで)

#### ☆第20回例会兼新年懇親パーティ

日 時：1月25日(木) 18:00開場  
場 所：外国人記者クラブ  
有楽町電気ビル北館20階  
テーマ：イギリス  
会 費：7,000円(同伴者 5,000円)

#### ☆実記を読む会

12月7日(木) 18:30～ 音楽・忘年会  
1月11日(木) 18:30～ ロシア  
2月8日(木) 18:30～ ウィーン万博  
3月8日(木) 18:30～ オランダ  
会場はクラウンインターチェンジプログラムです。

#### ☆歴史部会

日 時：1月19日(金) 18:30～21:00  
場 所：国際文化会館D会議室  
テーマ：「私の伊藤博文論」  
報告者：石川直義氏  
会 費：会場費 1,500円(食事はできません)

#### ☆関西支部

日 時：2月16日(金) 13:00～17:00  
場 所：大阪大学工業会会議室  
会 費：2000円  
ご照会は山崎まで(Tel・Fax:06-6853-3137)

#### 編集後記

◇慣れない割り付けが、概ね終わりかけた十一月三十日、幹事の小田八郎氏の訃報が入りました。生前のご尽力に感謝すると共に、慎んでご冥福をお祈りいたします。

◇長い時間とメディアを総動員して争われたアメリカの大統領選挙は、数百票の差をめぐり、リカウントが行われ、十五%程度の首相が、民意を代表しているはずの国会で信任されるという不可思議がまかり通っています。日米で同時発生した、民主主義を支える制度の機能不全は、単なる偶然なのでしょうか。

◇「ドイツ旅行記」は、岩崎氏のデジタルカメラが威力を発揮し、紙面から臨場感がよく伝わってきます。スライド上映会会場におけるメンバーの緊張した面持ちと、ライン河の船旅を楽しむにこやかな笑顔の対比が印象的です。

◇幹事で吉川利一著「津田梅子」(中公文庫)が話題となり、書店で探しましたが、版元の品切れでどこにもありません。ところが、近くに来たところ、ブックオフを覗いたところ、簡単に見つかりました。一冊ものの文庫は、神田店に沢山あるようです。